HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イーゴリ遠征譚（訳及註）2
Author(s)	木村, 彰一
Citation	スラヴ研究, 2, 105-111
Issue Date	1958
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4933
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113000.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

イーゴリ遠征譚

（承　前）

木村彰一訳

57. トロイアのたたかいは遠い昔の物語，ヤロスラーフの御代もすぎ，かのオレークの，スヴャトスラーフの子オレークのいくさも今は語り草．

58. このオレークこそ，その昔，一剣もって風雲をよび，全地に矢の雨をふらせたる者．

59. この公出陣のみぎりは，必ずトムータラカンの町でこがねのあぶみを踏んだ．

57.「トロイアのたたかい」——J сѣчи (=сѣчѣ) Трояни, PA вѣчи Трояни. La Geste は Slovo の中に Troia 戦争の reminiscence を見ようとしていますから (14 の註参照)，1812 年に焼失した原写本を読んでいた Karamzin の証言を生かして PA の вѣчи を сѣчи と読み，「(Troia の) たたかい」と解するわけです．ただし，もし多くの研究者たちが考えているように，Троян が古代ロシアの神話的人物の名であるとするなら (例えば Lixačev, op. cit., 385, 408; R. Nahtigal, Staroruski ep, Slovo o polku Igoševě, Ljubljana, 1954, 67 f., 75), PA の вѣчи (=вѣци) をそのまま残して，「(Trojan の) 時代」と訳することになります．なお Nahtigal (75) は，вѣчи を採用する理由として次の лѣта Ярославля との相応をあげ，この箇所は異教時代，Jaroslav Mudryj の黄金時代，及びその孫 Oleg Svjatoslavič の時代のみっつを列挙しているものと解しています (Lixačev, 408 もほぼ同じ)．しかし，私見によれば，もし Nahtigal, Lixačev のように解釈するならこの三つの時代の列挙は，この作品の主人公 Igor' のぞくする 12 世紀末の時代とどのような関聯においてなされたか，ということが疑問として残ると思われます．Igor' の時代はいわば Oleg の時代の連続で，諸公の抗争による Rus' の危機が去るどころかますます深刻化しつつあった時期ですから，もし作者が時代を問題としているとするなら，危機の時代のはじまりをなす Oleg の「遠征」(плъци!) だけをきりはなして，作者が憧憬してやまない神話時代，Jaroslav の時代とならべる必然性はむしろ稀薄です．又この箇所の動詞は，были, минула, были と，いずれもいわば「回顧的な」tense である perfect を用いていること，又 66 に J то было въ ты рати (PA ,) и въ ты плъкы (A полкы) というふうに同じ perfect によって今度はあきらかに過去の「戦争」ないし「遠征」のことが語られ，しかもそれらが Igor' Svjatoslavič の「遠征」と対比されていること (J a сицеи рати не слышано) はとくに注目にあたいします．これらのことを考えあわせるなら，57 の PA вѣчи を сѣчи に変え，作者は「前代未聞」(66) の Igor' の「遠征」を更にきわだたせるために，過去の三つの時代の「戦争」(「時代」そのものではなく) を引合いに出したものと考える方がより妥当ではないかと思われます．

ヤロスラーフ——5 のそれと同じく Jaroslav Mudryj († 1054).

オレーク——Oleg Svjatoslavič («Gorislavič», † 1115), Jaroslav の孫，Igor' Svjatoslavič の祖父，はじめ Tmutarakan' の公，後に Černigov の公．彼は Černigov の ol'goviči の祖で，Vladimir Monomax の宿敵でした．なお 58-59 の註参照．

58-59. 57 にその名の出た Oleg の父 Svjatoslav の死 (1076) 後，その兄弟 Vsevolod が Černigov の公位につきました．Oleg ははじめ Vsevolod のもとにいましたが，1078 年 Tmutarakan' に逃れ，同年，翌 1079 年，及び 1094 年の 3 度にわたって Černigov に遠征をこころみ，最後の遠征によって Černigov の公位を Vsevolod の子 Vladimir Monomax から奪回しました (年代記 Lavrentij 本 1077, 1078, 1079, 1094 年の項参照，除村訳では 146 f., 151, 170 f.)．なお Oleg は終始 polovcy の味方で，3 度の遠征の度ごとに彼らの援助をあおいだため，年代記作者によって筆誅を加えられていますが (年代記，除村訳 171)，Slovo の作者は，Černigov 遠征において大義名分のあったのはむしろ Oleg であるという理由から，どうやら彼にたいして年代記作者程の悪意はもっていないように思われます．なお 61 の註参照．

「こがねのあぶみを踏む」(59) という表現は 26 にも使われています．「征途にのぼる」という意味の古代ロシア語特有の表現です．

60. その音をいにしえの大ヤロスラーフも心してきき,
61. 又チェルニーゴフなるフセーヴォロトの子ヴラジーミルも朝くるごとに耳をおおった.
62. おごりゆえに神のさばきをこうむったはヴャチェスラーフの子ボリース. 若くいさましきオレーク公をばはずかしめたむくいに, 経かたびらにつつまれて, 曠野の青草に身をよこたえた.

---

60. 「いにしえの大ヤロスラーフも」——ここは PA ともに давный великый Ярославь сынъ Всеволожь (A -ъ) : a Владиміръ... となっており, これを Ярославль сынъ Всеволодъ と読んで上記 Oleg の最初の 2 度の遠征の相手であった Jaroslav の子 Vsevolod を指すものとする読み方もあるようですが (例えば A. Obrębska-Jabłońska, op. cit. 103, 122), しかし (60)... Ярославь. (61) А сынъ Всеволожь Владиміръ... というふうに, punctuation と接続詞 a の位置をかえるだけの J (及びその他多くの注釈者) の読み方の方が正しいように思われます. ただし, すでに 1054 年に死んだ Jaroslav が「心してきいた」ことになっている Oleg の「こがねのあぶみを踏む」音は, ここでは Lixačev (411) が考えるようにただ漠然と公達の間の内乱を指すのではなく, M. Szeftel (La Geste, 114) が指摘しているように, Oleg と同じく Tmutarakan' から Černigov へ入り, Listven' 河の戦い (1024) で Jaroslav をやぶった Mstislav Vladimirovič の遠征を指すものであることはあきらかです. 年代記 Lavrentij 本 1024 の項 (除村訳では 104 ff.) を参照.

61. 「朝くるごとに耳をおおった」——年代記 Lavrentij 本 1094 の項 (除村訳では 170 f.) によれば Oleg の第三の遠征 (58-59 の註参照) の相手であった Vladimir Monomax († 1125) は, Oleg が Černigov に迫った時あえて出撃しようとはせず町に籠城し, 又「Oleg と和を結び, 町から出て, Perejaslavl' の父の玉座へと赴いた」ことになっています. これは Vladimir がいわば Černigov の公位のさん奪者である Vsevolod の子であるため, 町の住民の支持が得られぬことを恐れたためでしょう. (Oleg の 1078 年の遠征の時も, Černigov 人達は Vladimir に敵対しています. 除村訳 148 参照). Vladimir が「耳をおおった」という比喩的表現にはいろいろの解釈があるようですが (例えば A. Obrębska-Jabłońska, 122 f 参照), 要するに上記の事実, つまり彼が町にこもってあえて Oleg と戦おうとしなかったことを指していると思われます (La Geste, 115 参照).

62. 「経かたびらにつつまれて, 曠野の青草に身をよこたえた」——J Бориса же...слава... на кавылу (PA канину) зелену паполому постла. PA の канину は古来問題になっている語です. 川の名とする注釈者もありますが (例えば Lixačev, 412; なお Nahtigal, 76 をも参照), J は N. Tixonravov 以来の多くの研究者と同じく, Zadonščina (Undol'skij 文庫本) の на зеленѣ ковылѣ травѣ, その他の parallel passages によって канину を кавылу (stipa pennata, はねがや) に訂正しています. なお Lixačev, 84, 412; Nahtigal, 35 は зелену を паполому にかけて訳していますが, もし канину を кавылу と訂正するならこの形容詞は当然 кавылу にかけるべきです.

「ヴャチェスラーフの子ボリース」——Boris Vjačeslavič は Oleg Svjatoslavič のいとこ. Vsevolod の不在中 Černigov の公位につきましたが, 8 日後 Tmutarakan' にはしり, 1078 年 Oleg と共に Černigov を攻め (58-59 の註参照), いったんは Vsevolod をやぶって Černigov に入りました. その後の事情は年代記 Lavrentij 本によれば次のとおりです:「そして Vsevold は Kiev の, おのれの兄 Izjaslav のもとへ来た... そして Izjaslav は息子 Jaropolk と共に, 又 Vsevolod は息子 Vladimir と共に進発した...そして Oleg は Boris に云った,『我らは彼らに立ちむかうことはするまい, 我らは四人の公に対抗することはできない. 叔父たちに使をおくって (和議を) 乞おう.』すると Boris が彼に云った,『汝わが戦備ととのえるを見よ, 我は彼らすべての敵である.』彼は神が傲慢なる者に敵対すること...を知らず大いに誇った (参照: Slovo 62—「おごりゆえ神のさばきをこうむったは...ボリース」). しかして彼ら二人は (公達に) むかって進発した. 両軍が村のそばの Nežatina niva にあって相会した時に, 激しい戦闘が起った. 最初に, 大いに誇った Vjačeslav の子 Boris が殺された」(Povest' vremennyx let, pod red. V. P. Adrianovoj-Peretc, Moskva-Leningrad, 1950, I, 132 f., 除村訳では 147 f.).

63. その同じ曠野から，スヴャトポルクも，二頭のマジャール馬のあいだにのせてみとりつつ，なき父を，キエフなる聖ソフィアのみ寺へとはこんだのだ.
64. かくてゴリスラーヴァの子なるオレークの代に，いさかいのたねはまかれて芽をふき，ダージボークの孫らは貧にしずみ，公たちのあらそいに，民のいのちはほそるばかり.

「若くいさましき」——храбра и млада князя. ある注釈者たち（例えば Lixačev, 412; Nahtigal, 76）はこの二つの形容詞を Boris にかけていますが，冒頭の Бориса же... と大分はなれている点に無理があり，又 context から云っても，この二つの形容詞は「おごりゆえに神のさばきをこうむった」izgoj の Boris よりは，Černigov の公位の正当な継承者であり，恐らくこの意味で Slovo の作者も一種の同情を持っているかに見える Oleg にかけるのが適当であるようです（La Geste, 188 の Jakobson の訳，及び Obrębska-Jabłońska, 123 参照）.

63.「その同じ曠野から」——J Съ тоя же кавылы, PA съ тояже Каялы. Каялы にしろ кавылы にしろ，62 で暗示されていると同じ（тоя же）Nežatina niva を指すことはあきらかです. 多くの注釈者たち（例えば Lixačev 15, 414; Nahtigal, 34; Obrębska-Jabłonska, 103, 123）は，PA の Каялы を残し，これは Igor' の悲劇の場面である川の名が Nežatina niva のたたかいのいわば metaphor («metaforyczne porównanie» — Obrębska-Jabłońska, 123) として用いられているという風に解するようですが，J はむしろ съ тоя же によって示される論理的なつながりの方を重要視して，62 の канину>кавылу の訂正を 63 へも及ぼしています.

スヴャトポルク——Svjatopolk, 上の年代記からの引用にある Nežatina niva の戦いで死んだ Izjaslav Jaroslavič の子. 年代記 1078 年の項（(Pov. vr. let, I, 133, 除村訳では 149）によれば，Izjaslav の遺骸は聖母教会（Церковь святой Богородицы, 又の名 Десятинная церковь）に安置されたことになっており，Slovo の叙述と矛盾するように見えますが，M. Szeftel はドイツの年代記作者 Thiethmar (Dietmar) von Merseburg の記事を引いて，聖母教会が Церковь святой Софии ともよばれていたことを立証しています（La Geste, 116）.

「みとりつつ···はこんだ」——J полелѣя (PA повелѣя). Svjatopolk は当時のロシアの習慣に従って前後にならべた 2 頭の馬を 2 本のさおでつなぎ，その上に担架をのせて，父の遺骸をはこばせたものと見えます. しかも，その際，振動をできるだけ少くするために，左ないし右の前後の足を同時に踏み出すように訓練された馬（参照：P 及び J междю...иноходьцы, 但しこの訳文では省略）が用いられたという事情は Potebnja 以来の повелѣя>полелѣя (Jakobson の訳文では укачивая...снарядил, La Geste, 188) の訂正の理由のひとつになっています. Lixačev (15, 414) は Svjatopolk が Nežatina niva のたたかいに参加しなかったという理由で，повелѣя を повелѣяти (=повелел привезти) と訂正していますが，この訂正は前のものより無理な上に，あまりに散文的な気持がいたします. Jakobson (La Geste, 84) の指摘しているように，なるほど Izjaslav の遺骸を Kiev にはこんだのは Svjatopolk でなく，その兄弟 Jaropolk ですが，しかしこの二つのよく似た名前の混同は大いにあり得ることであり，それに полелѣя は causative と取っても一向にさしつかえがないわけです.

64.「ゴリスラーヴァの子なるオレークの代に」——при Олзѣ Гориславличи. Oleg の父は Svjatoslav ですから，当然 Святославличи とあるべきですが，ここでは故意に曾祖父 Vladimir の不幸な妻 Rogněda のあだ名 Gorislava から作った父称が使われています. Rogněda は Vladimir Svjatoslavič によって父（Polock の公 Rogvolod）を殺され，無理強いに妻にされ，Jaroslav, Mstislav, Izjaslav (Polock の) を生みました（年代記 Lavrentij 本 980 年の項，除村訳では 58 f., 63）. そのあだ名 Gorislava は元来 goréti（もえる）と同一の語根から派生した名前ですが，Slovo の作者は gore（不幸）に関係づけ，「一剣もって風雲をよび」(58), Rus' の民に塗炭の苦しみをなめさせた (64, 65) Oleg を Gorislavlič (=Goreslavlič) と呼んだものと思われます. なおこの様な地口めいた表現は古代ロシア文学のほかの作品にも出て来ます. 例えば кому Переславль, а мнѣ гореславль, кому Боголюбиво, а мнѣ горе лютое («Molenie Daniila zatočnika», N. K. Gudzij, Xrestomatija po drevnej russkoj literature XI-XVII vekov[6], Moskva, 1955, 140 による）.

「ダージボークの孫ら」——J Даждьбожа (PA Даждь-Божа) внука. Daž'bog は Vladimr Svjatoslavič がキエフにその偶像をたてた古代ロシアの異教の神のひとり（年代記 980 年の項，除

65. この時ロシアの国原は，農夫らのかたみによび合う声もまばら．しかばねわかつ灰色からす，珍味にあかんとおめきかわす黒がらすの声のみがまびすしかった．
66. これぞげにありし世のいくさのさま．さもあらばあれ，このたびの合戦こそ前代未聞．夜あけより日のくれまで，日のくれよりあかつきまで，はがねの征矢はあられととびかい，かぶとを打つ太刀の音，フランクの槍音は，瞬時もやまず野にこだまする．
67. ここポーロヴェツの地の奥ふかく，名もしらぬ遠きひろ野に，軍馬のひずめは黒土をたがやし，骨はまかれて血潮にうるおう．その骨やがてロシアあまねく，哀傷の芽をふき出した．

68. きけ，あのどよめきは何の音，あの鈴のねは何の音？
69. この朝まだき，イーゴリ公は，味方の勢をいくさのにわによびかえす，いとしの弟フセーヴォロトを見殺しにするにしのびず．

村訳では 62)．「ダージボークの孫ら」は Rus' の民を指しますが，この注目すべき表現の由来について Jakobson (La Geste, 295 ff.) は極めて興味ある二つの仮説を提出しています．1. 年代記 Ipatij 本 1114 年の項に Ioannes Malalas の年代記のスラヴ語訳の断片が挿入されており，それによればエジプトの王 Feostъ 又は Festъ (ギリシアの Hēphaistos) は Svarogъ とよばれ，Feostъ のあとをついだ「太陽」(ギリシアの Hēlios) は Dažьbogъ とよばれ，その後を Sirъ (ギリシアの Osiris) がついだことになっている．この Sirъ は古代ロシアでは rus- と混同される傾向があったので，Rusъ は Dažьbogъ の孫と考えられるようになった．或いは又，2. Malalas の原典では Horus が Osiris のあとをついだことになっている．ギリシア語 Hēphaistos, Osiris の Hē-, O- はロシアでは定冠詞 (ѣ, о) と誤解され Feostъ, Sirъ と云う形を生じたところから見て，Horus は Rusъ という形でロシア語に入ったのかも知れない．だとすれば，Dažьbogъ の孫とはまさしく Rusъ である．

なお年代記 Lavrentij 本 (Pov. vr. let, I, 198) にも Feostъ-Svarogъ 及び Solnce-Daždьbogъ が出て来ますが，Sirъ ははぶかれています．

65. 「農夫らのかたみに呼び合う声もまばら」——J pѣtko ратаевѣ кликахуть (PA кикахуть). кикахуть>кликахуть の訂正は Sreznevskij 以来多くの注釈者によって採用されていますが，Nahtigal (35) 及び Lixačev (16, 86) は кикахуть をのこし，それぞれ vzklikali, покрикивали [на лошадей, распахивая землю] と訳しています．кликахуть への訂正は Zadonščina (Undol'skij 文庫本) の parallel passage に ни ратаи, ни пастухи в' полѣ не кличут' とあることがそのおもな根拠です．кикати という擬声語は Slovo の他の箇所にも使われています (J 168 の зегзицею . . . кычеть) し，Nahtigal (77) の主張するようにロシア語 (参照：кичка) その他のスラヴ語に存在することは事実ですが，Zadonščina の parallel passage がなかったとしても，65 の context では кликахуть (Jakobson の訳では перекликались, La Geste 188) のほうがより妥当であるようです．

67. 戦闘を農耕ないし婚礼 (72, 73) にたとえることは，古代ロシア文学及び口碑文学の作品にしばしば見うけられます．

69. PA では 68 の . . . что ми звенить の後ではなく，69 の предъ зорами の後に疑問符がありますが，J では疑問符を звенить の後にうつしてあります．Lixačev (16) その他の研究者たちの P давечя>далече の訂正は全く不必要です．「味方の勢をいくさのにわによびかえす」——年代記 Ipatij 本 1185 年の項 (N. K. Gudzij Xrestomatija, 73 による) に次のような記事があります．「日曜日のあけ方，(Igor' の) 軍中にあった Kovui (の部隊) が混乱におちいって逃走しはじめた．その時 Igor' は負傷していたため馬に乗っていた．彼は彼らを軍にひきもどそうと欲して，彼らの部隊に赴いた．」なおこの後に Igor' が本隊から離れすぎたために帰途 polovcy によって捕えられるてんまつが述べられています．

70. たたかうことひと日，たたかうことふた日，——三日めのまひる近く，イーゴリの旗はついにたおれた．
71. 流れも早きカヤルィーの岸に，はらからはたもとをわかつ．
72. 血潮の酒も今はつき，
73. いさましきロシアの子らは，婚礼のうたげをとじた．縁者らを酒にあかせて，みずからはロシアがためかばねとなって野に伏した．
74. 草はなげいて打ちしおれ，木は悲しんで大地にひくく枝をたれる．
75. げに，はらからよ，はや哀傷の時は来た．つわものどもは曠野の露と消え，

「フセーヴォロトを見殺しにするにしのびず」——年代記 Ipatij 本の上掲の記事より少し後に，「そして Igor' は捕えられてから，おのれの兄弟 Vsevolod がはげしく戦っているのを見て，兄弟の死を見なくてもすむように，自分の魂に死を願った」とあります．なお Slovo 69–75 の描写が措辞の上でも年代記 Ipatij 本のそれと共通点が多いことについては，Jakobson, The Puzzles of the Igor' Tale, «Speculum», Vol. XXVII, No. 1, 59 を参照．

71. 「はらからはたもとをわかつ」——Ipatij 本 (Gudzij, Xrestomatija, 74 による) の次の記事参照：「そしてその時，戦闘の終り近く，彼らは各方面にわけられ，各自おのれのテントへ赴いた．Igor' は Targolove 族，(わけても) Čilbuk という男にとらえられ，又彼の兄弟の Vsevolod は Gza の子 Roman にとらえられた・・・」

73. 「縁者らを酒にあかせて」——сваты попоиша. 上述の如く古代ロシア文学にしばしば見られる allegory ですが，とくに svaty という語が使ってあるのは Igor' のみならず多くの Rus' の公たちが polovcy と姻戚関係にあったという史実（その例については Lixačev, 417 を参照）と無関係ではないはずです．Igor' については年代記 Ipatij 本 (Gudzij, Xrestomatija, 74 による) の「そしてその時，戦場において，Končak はその svat たるに Igor' について保証を与えた．そのゆえは彼が負傷していたからである」という記事を参照．Igor' の子 Vladimir が捕虜になっている間に Končak の娘と結婚したため，Igor' は Končak の svat となったわけです．

74. 「木は悲しんで大地にひくく枝をたれる」——J древо с(я) тугою къ земли преклонило, PA древо стугою . . . преклонилось. 多くの注釈者たち（例えば Lixačev, 17; Nahtigal, 36）は с と тугою をきりはなすだけで PA のテクストをそのまま承認していますが，J は Zadonščina (Undol'skij 文庫本その他) の parallel passage にある а древеса тугою к земли преклонишася（ないし приклонишася）及び Slovo 自体の J 199 древо стугою къ земли прѣклонило (A преклонило) によって，上記の如く訂正しています．

75–78. Jakobson の詳細な研究によれば (La Geste, 303 ff.), Slovo のこの箇所には，年代記作者も利用している Patara の Methodios の作と伝える「黙示録」その他のビザンチン・ブルガリアの終末観文学，ないし教外典文学の影響が，発想の上でも措示の上でもありありと現れています．例えば уже пустыня силу прикрыла (Slovo, 75)—и земле опустеють . . . не бо суть ратьни вои нь чеда пустыне и на опущение суть пришли (Patara の Melhodios の「黙示録」)；рекоста бо братъ брату «се мое, а то мое же», и начяша князи про малое «се великое» млъвити, а сами на себе крамолу ковати. А погании съ всѣхѣ странъ прихождаху съ побѣдами на землю Рускую (Slovo, 77–78)—тогда вьстанеть брать на брата . . . и начнуть рещи «азь есьмь», а други «азь есьмь» . . . и сьразеть се и пролѣють крьвь многу, и будеть метежь великъ . . . и ту паки приде двѣ чести Измаильтѣнь и поплѣнить всу землю блъгарьскую . . . и ту створеть разбои великъ (Videnie Daniila).

更に又，上掲の Pseudo-Methodios のスラヴ訳その他当時の Rus' に行われていた教外典学文学の作品に天地創造暦による第 7000 年紀のおわりに，「のろわれたる処女」(“okajannaja děvica”—Pseudo-Methodios) が黒海 (Pontъ) から出現し，それと共に世界の滅亡が始まるという予言が見られること，他方 Pseudo-Methodios のあるギリシアの version にやはり世界の終末にあたって現れるアンチ・クリストの母について parthenos, to onoma autēs “adikiā”, ないし to de epōnumon autēs “apōleia” と書かれていることは，Slovo, 76 で「乙女となって (děvoju) トロイアの国にしのび入る」ことになっている「よこしま」(obida) の prototype がギリシア終末観文学にあると断

76. ダージボークのたけきすえの間に「よこしま」があらわれたのだ．その「よこしま」は，乙女となってトロイアの国にしのび入り，ドン近き青海原に，白鳥のつばさはためかせ，みだれはらむ世をよびさましたのだ．
77. 異教徒ばらとのたたかいに，公達の獲たる勝利も今は夢．兄弟たがいに「こはわがもの，これもわがもの」とひしめき合い，公たちは小事を目して大事となし，やがてはわが身にかえるべきいさかいのたねをまく．
78. かちほこる異教の勢はえたりかしこしと四方よりロシアの国にせめかかる，

定する決定的な根拠となり得ると Jakobson は考えます．なぜなら，彼によれば，parthenos apōleia はスラヴ語の文献に odiva (=děva) pogibel'na としてあらわれており，又parthenos adikiā のスラヴ語訳としては děva obida しか考えられないからです（前掲 Jakobson, The Puzzles etc., "Speculum" Vol. XXVII, No. 1, 64 をも参照）．なお Igor' Svjatoslavič の遠征の行われた 85 年は前述天地創造暦では 6693 年，つまり 7000 年紀の第 7 世紀のおわりにあたっていますが，この年に起った polovcy の侵入による Rus' の荒廃がビザンチン・ブルガリアの終末観文学に予言された世界の滅亡と結びつけて考えられたことも，Jakobson の指摘するとおり，年代記の 6600 年代のはじめと終りの記事に Pseudo-Methodios からの引用ないしその reminiscence が多いという事実によって間接的に証明されます．Slovo, J 152 の на седмомъ (Р На седьмомъ) вѣцѣ という表現もこのような終末観が 12 世紀末の Rus' の "knižniki" によって強く意識されていたということを考慮に入れることによってはじめて充分に理解できるものと思われます．

次に J 76 の「よこしま」がドンの近くの青い海の上で「白鳥のつばさをはためかせた」(въплескала лебедиными крылы) という表現が問題になりますが，これについても Jakobson は中世ギリシアの予言文学の中にその典拠を求めています (La Geste, 305)．即ち Pannonia 平原における Hun 族の脅威について述べたギリシアの Leon Mudrec のスラヴ語訳（セルビアの version）にある На Угрехъ слишу яко клеплють; да аще клеплють? разве плештуть и рикають и гласи испуштають, крила потресають がそれで，Jakobson は Hun 族とテュルク系の polovcy は Rus' を東方から脅威する遊牧民族として Slovo J 105 に同時にその名が出ていることを指摘し (по Рускои земли простршася Половци...и великое буйство подасть Хинови)，更に白鳥がテュルク諸族のトーテムであったという K. H. Menges の研究 (op. cit., p. 1 ff.) によって，「よこしま」が「白鳥のつばさ（原文は上にあげたように双数でなく複数）はためかせ，みだれはらむ世をよびさました」ことは polovcy の侵入によって Rus' に危機がおとずれたことを意味するものと解しています．

以上が Slovo, J 75-78 の解釈に関する Jakobson の周到な研究の大要です．この箇所にかぎらず，総じて Jakobson（及び H. Grégoire）による Slovo におけるビザンチン文学の substratum にかんする研究は，A. Stender-Petersen も云うように (op. cit. 152), La Geste 中もっとも光彩をはなっている部分で，Slovo の精神史的背景が先人の予想したよりははるかに広汎で奥ふかいものがあることを遺憾なく証明し，Slovo を中心とする古代ロシアの作品の研究にたいして将来性のゆたかなひとつの新しい研究方向を暗示した点に，劃期的な意義があると思われます．

なお Lixačev (418) は従来の多くの研究者たち（例えば Orlov, Peretc）にならって deva-obida の形象が口碑文学から来たものであると考えていますが，彼のあげている口碑文学からの例は正確には deva-obida ではなく，deva-Sudinuška の形象である上に，その deva が何ゆえに Rus' に災厄をもたらすかということは全然説明されていません．もっとも deva-obida の形象が実際に口碑文学に用いられていることは事実ですが（参照：Obrębska-Jabłońska, 125 f., なおこの注釈書は他方では Jakobson の説をかなりくわしく紹介しています），私見によれば，この形象の用いられている context, つまり様式的環境ともいうべきものが根本的に異る以上，少くとも口碑文学の reminiscence だけで slovo の obida, deva, lebed' の諸形象を説明し去ることはあまりに安易な態度ではないかと思います．ソヴェートの学者達が強調する Slovo と口碑文学との間の密接な関係を否定することはできませんけれども，他方又 Jakobson の指摘するように ("Speculnm, Vol. XXVII, No. 1, 65), もし Slovo を「Kiev の，及び汎ヨーロッパ中世の context から故意に孤立させる」ならば，Slovo が「無意味で，こんとんとした，ひとつの解きがたい謎」と化して了うことも又確かでありましょう．

76-77 「みだれはらむ世をよびさました」云々——J убуди (A у буди) жирня времена (P . A ,) усобица. (PA . なし) (77) Княземь (P -мъ) на поганыя побѣда (PA なし) погыбе. Lixačev (17, 87) は J 76 のさいごでは PA の punctuation を生かし, убуди を упуди に訂正して, «прогнала времена обилия» と訳し, 次の部分 (J 77) では, P の Усобица княземъ на поганыя погыбе をそのまま認めて, «борьба киязей против поганых прекратилась» と訳しています. 多くの他の注釈者も同様です (例えばNahtigal, 36 37; Obrębska-Jabłońska, 103, 152). この様な読み方は, усобица がここでは単に борьба を意味するというかなり恣意的な解釈を前提としていますが, Jakobson はこれを認めず, 上記の如き訂正をほどこしました (La Geste, 85). つまり усобицаを Gen. sg. と取って жирня にかけ, поганыя と погыбе の間に主語として побѣда を入れたわけです. この解釈の強みは усобица на поганыя という結合そのものがかなり無理であるのに反して, на поганыя побѣда ならば多くの用例があること, побѣда の挿入によって alliteration (по-) が更に強化されること, 更に убуди が P のまま残り, усобица も普通の意味に解釈できること, などです. なお A. Stender-Petersen (op. cit. 148) は, この訂正を支持しています.